

〔官展改組と春陽会〕

・『読売新聞』 昭和十一年六月十四日 (27)

辞任会員は補充して

断乎、帝展は存続

新人展の望み捨てず 平生文相も態度を明かにす

十六会員の抜打ち的辞表提出によつて極度に狼狽の文部当局では、辞表を保留のまま一応清水院長の手で切崩し工作を試みることになつたものの、各会員の翻意は到底絶望と観念してゐる模様であるが、美術院だけはあくまで現在のまま存続する方針をたて、時期を見て会員の補充を行ふ意向である。現在十六会員の辞表提出により、病死した赤塚自得、土田麦僊の両氏を加へて会員欠員は十八名となり、すでに会員の定員五十名の三分の一を失つて総会開催不可能となり、完全に美術院としての機能の一部がくずれて自然解消の運命に直面してゐるので、これの建直し工作として文相の手で一部会員を任命補充する方針である。今秋文部省が企図した新人登龍門たる監査展は是非とも万難を排して開催すべく意気込んでゐる。(……)

美術院会員を辞任した和田英作氏は東京美術学校校長も辞任することになり、十五日午前中、和田氏自身文部省に出頭して文相宛辞表を提出することになつた。また同校日本画部主任教授川合玉堂氏の教授辞表は、和田

校長の決裁を経て十三日文部省宛て速達郵便を以て提出された。両氏の辞任理由は、四日の円卓会議において文相説明要旨の第四項第一条に「この秋より新しい機構に依る展覧会を催したいのです」とあり、これは美術院の権威を無視し監督権を濫用するもので、かかる大臣のもとに官學の教職にあるを潔しとしないと云ふにある。和田画伯は語る。

「今回の辞職は行きがかりや感情問題からではなく、正面から文相に対する不信任を表明したのです。川合君も私もかねて機会があつたら辞職したいと考へてゐたところですが、かかる事態において実現するとは遺憾の極みです。私は今後老ひ先きも短いことだし、絵筆一本に精進し何か一つでも一生の大作を完成したいと思ひます。」

昨年の「松田改組」に馳せ参じて帝展会員となつた石井柏亭、有島生馬氏らの旧二科会員と袂を別つて在野側に踏み止まつた正宗得三郎氏らの二科会では、来る十五日夜、京橋宝町・味の素ビルのアラスカに会友会議を開催、翌十六日夜は四谷番衆町の二科会事務所に会員、会友の連合会議を開いて、今回の「平生改組」に対する意見を闘はすことになつたが、同会の空気としては大体「平生改組」を支持するとか支持せぬとかの積極的態度を採らず、傍觀的態度に出るのではないかと見られてゐる。